

# 六百年前の參宮紀行

——加藤博士の坂翁大神宮參詣記——

三重縣津市師範學校長 福田 謹 四 郎

數年前加藤支智博士著「神道の宗教學的研究」といふ一書を讀んだ際、其中に坂士佛の六百年前の參宮記云々の記述があつて好奇心から一度夫れを讀んでみたいと思つたのであつたが、最近知人岡部榮信氏（同氏は群馬縣屈指の富豪だが、富豪としてよりも篤行家・敬神家として知られた人）から、偶然「坂翁大神宮參詣記」に前學習院教師サドラー氏の英譯本別冊を添へた寄贈を受けた。見れば其著者が加藤博士であるので、聊か奇縁を感じると共に、伊勢に住む私に對する何かの啓示のやうな氣がして早速一讀した。よつて、こゝに博士の「解説」を便りとして、所感を記すことにした。博士によると、參宮記の舊いものには後鳥羽天皇の朝に「俊乗坊參詣記」があり、續いては弘安九年の「通海參詣記」があつて、坂翁のもの（後村上天皇の興國三年）が必ずしも最古ではない。しかし、想文兼備せる點に於て、是こそは「參宮記中の白眉」である。讀んでみると文章が暢達流麗であるばかりでなく、隨處に優れた和歌漢詩が挿んであり、讀む者をして自ら其境にあるの感あらしめるもので、是を一の紀行文學としても吉野時代に於ける傑作の一とするに足るであらう。試みに安濃津の條を引用しよう。

この津は江めぐり浦遙かにして、ゆききの船人の月に漕ぐこゑ、旅泊の曉の枕に聞えて、あらし浪風の音忍びがたく待りしかば「風寒き磯家の枕夢さめてよそなる浪にぬるゝ袖かな」安濃津をいでて阿漕浦をすぎゆく程にしはやの煙心ぼそく、うはの空に旅だつ思ひをそへ、友なし千鳥の鳴きまよふこゑを聞きては、跡もさだめぬ身のたぐひはありけりとおもひしる

しかし、本書の眞の價値は、文章の美にあるのではない。實に、著者の信奉する「佛教信仰と外宮神道とを結び附けた信仰的な哲理思想の幽玄なるものを以て著者の神道信仰を記述してをる」點に存する。而して「斯かる神佛一如の信仰を以て、我が皇祖を奉祀した伊勢の大神宮に參拜し―目下世間で強調してゐる敬神崇祖の事實が、醇化した宗教的大信念となつて、その聖火を燃やしてをる跡を、本書一篇歴々徴すべきものがある」のが最大特長である。

加之、我々此國に住むものにとつて興味のあることは、前に引用したやうに、當年に於ける安濃津から山田までの參宮街道沿線の光景が、宿驛といはず、山川といはず、神社佛閣といはず、あるがまゝ、見るがまゝに描かれてゐることである。試みに思へ我等が現に住む彼の村、此の町の六百年前の面影が、髣髴として、我が眼前に展開せられたとして誰か感興を起さないものがあらう。本書の著者は一般に坂士佛とされてゐるが、實は其父十佛の著である。而して坂氏は大和の人、祖九佛は醫を以て業とし、京都に移り住み、十佛之を繼ぎ博學多聞、和歌を以て世に鳴り、士佛も醫業を繼ぎ詩歌を善くして、高貴の恩寵を得たといふ。

此の參詣記には十佛が漢梵兩學に通じてゐた爲、故事や佛語が盛んにあらはれ、難解なところが多いが、幸に本書には博士夫人節子女史のものせる親切な註解があり、尙全文の現代語譯もつけてあるから、何人も容易に卒讀することが出来る。更に之を學術的に研究しようとする人のために、博士の執筆に成る詳細なる解説があり、又参考として岡田米夫、鳴神克己、大西源一諸氏の論文を加へ、各種の寫眞や地圖まで附けてある。要するに單なる讀書子の爲にも斯道の専門家の爲にも、用意到れり盡せりといつてよい良書である。私は文學にも神道にも、全くの素人であるが、一讀して得るところが甚だ多かつた。未讀の者、就中本縣人士に之を大いに推薦する次第である。(聖地教育、三)